

2026 ナガサキからの平和アピール（案）

1945年8月9日11時2分。一発の原子爆弾が一瞬にして長崎を廃墟と化し、7万人を超える尊い命を奪った。戦後81年が経過した今なお、世界には約12,000発の核兵器が存在し、放射線の後遺症は被爆者を苦しめ続けている。核兵器がもたらす生き地獄を、二度と繰り返してはならない。「ノーモア・ヒロシマ、ノーモア・ナガサキ、ノーモア・ヒバクシャ」。核兵器のない世界は、被爆者の悲願である。

国際社会に目を向ければ核兵器の脅威は深刻さを増している。ウクライナ侵略と核兵器による威嚇が続けるロシア、ミサイル発射を繰り返す北朝鮮、緊張が続く中東など、核兵器使用の危機が現実味を帯びる中、2026年5月の第11回NPT再検討会議は、主要国の対立から3回連続で最終文書を不採択のまま閉幕した。核軍縮・不拡散体制の信頼を大きく損ねる、極めて遺憾な事態である。

しかし、私たちは立ち止まらない。2024年、日本被団協のノーベル平和賞受賞は、長年の被爆者の訴えが世界に認められた希望の光である。平均年齢が86歳を超え高齢化が進む被爆者の声を風化させることなく、戦争の悲惨さと平和の尊さを胸に刻み、未来を生きる次世代へと確実に継承していく。

平和な未来を切り拓くためには、国際社会全体が対話と連携をさらに強め、核兵器廃絶への具体的な行動を力強く進めるべきである。核兵器保有国をはじめとする世界のリーダーたちには、「核抑止論」に依存する姿勢を改め、軍縮への明確なイニシアチブと責任ある決断を強く求める。唯一の戦争被爆国である日本政府こそ、「核兵器のない世界」の実現に向けて、自らが果たすべき役割と責任を全うすべき時である。

連合は、原水禁、KAKKINとともに、NPT再検討会議に向けて署名運動を展開し、国内外から寄せられた524万筆を超える平和への意思を国連と政府に提出した。その重みを胸に、私たちはこれからも、核兵器廃絶と世界の恒久平和の実現をめざし、そして「長崎を最後の被爆地に」するために、原水禁、KAKKINをはじめ平和首長会議や国際労働組合総連合（ITUC）、長崎大学や長崎外国語大学などの教育機関、関係NGOとの連携を強化していく。

戦後・被爆81年の節目に平和への強い誓いを新たに共有し、対話と連帯を深め粘り強く運動を続けていくことをここに宣言する。

2026年8月8日
連合 2026 平和ナガサキ集会